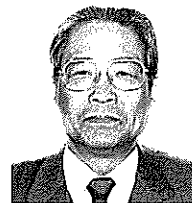


発刊によせて

取締役社長 **奥井大三**



「人生七十、古来稀なり」と申します。

我社は創業以来71年、鋼を相手の「もの作り」を本業として業容の拡大をはかってまいりました。その間、橋梁の分野では鉄道橋に始まり現在では道路橋も含めたあらゆる鋼橋の分野で活躍させていただいております。具体的には、本四連絡橋では日本初の複合斜張橋である生口橋ほか南備讃瀬戸大橋、番の州高架橋など、関西新空港関連では、その連絡橋のトラス桁とそれを支える巨大な鋼脚など、日本全国各地の巨大プロジェクトにも参入することができるようになりました。

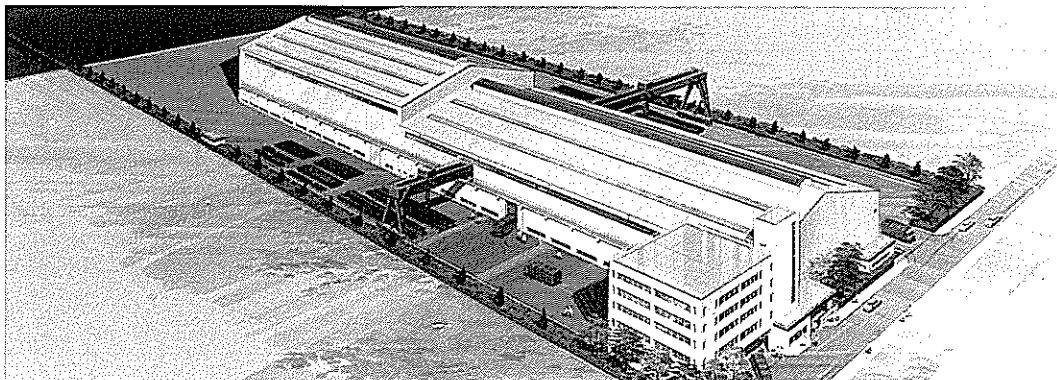
また、ビル鉄骨の分野では、東京都新庁舎、南海サウスタワーホテルなどの超高層ビルをはじめとする高度かつ、高精度の加工技術を駆使した鋼構造物でその社会的責任を果たしております。

社会の潮流は、構造形式、使用材料などの多種・多様化により構造物そのものの高附加価値化がはかられるようになりました。その結果、設計から施工にいたる全ての部門で最先端の知識、技術を必要とする時代になってまいりました。

企業には、その歴史の中に企業文化があります。当社のような所謂「もの作り」にとって大切なことは、歴史とともに蓄積してきた技能的、技術的ノウハウを最先端技術と有機的に結合することであり、その成果を企業文化の一部として、未来へ継承することにあります。

企業をいつまでも存続させる条件は、常に新しいことにチャレンジし、知見を高め、技術革新を繰り返しながら、成長し、その技術力によって現在の本業を核とした、核本業を強力に推進し、さらに第3、第4の柱を育て上げ、利益を生み出すことであるといえましょう。唐の詩人白居易は「人生、行客に似たり、両足、歩を停むること無し」と喝破して居ります。

当社が、社会資本の蓄積、生活環境の改善・向上に貢献する、創造的・個性的な企業として21世紀を展望しつつ、将来の無限の可能性に挑戦し、さらに大きく飛躍するためのTHINK TANKとして本紙が役立つことを願うものであります。



千葉工場（1992年完成予定）